この世は弱肉強食なの？

昔、鶯が弱い虫を食べているのを見て、この世の弱肉強食を嘆いた人があります。でも、生きるためには、何かを食べなければなりません。動物でなく、植物なら弱肉強食にはなるまいと考えた人もあります。

弱肉強食にはなるまいと考えて食べている米や麦。あの一粒一粒の中には、種族を保持しようとする生命があります。それを煮たり焼いたりして、人間は食べてしまいます。

神様は、人間が生きるために、火水をはじめ、その他一切をこの世に用意して下されているのです。要は、神様が人間のために用意してくだされているものを、どのようにして使っていくかにあるのでして、その使い方を誤りますと、人間自身を苦しめることになりましょう。

この世は神様のからだと仰せられていますが、菜の葉一枚でも米一粒でも、人間は種をまいたり、水をやったりして世話はできますが、菜の葉や、米そのものをこしらえることはできません。

ましてや、石油だのウラニウムだのに至っては、人間はこの世にあるものを使わせて頂いているとしか言いようがありません。

ですから、教祖の教えのように、水を飲めば水の味がします。神様が結構にお与え下されているのですから、ひときれの魚にも、ああ美味しいと、人間の身を養った魚を褒め、神様の御守護に御礼申し上げることの方が、弱肉強食を嘆くより大切でしょう。

しかしながら、人間が、人間以外のものに対する態度と、人間同士に対する態度とは、おのずと違います。人間が人間に対して、弱肉強食であっては天理に敵いません。

金の力で人を苦しめ、立場の上で人を見下し、いやなことは人にさせ、わが身さえよくば他人はどうでもよいという、たすける心のない、何がなんでも自分の言い分を通し、自分のものにするやり方は考えものです。

昔の人が嘆いた弱肉強食とは、つまるところ、人間のあくなき心のむごさであったのでしょう。

やさしい心になりてこい、と仰せられたばかりか、わが身どうなっても人をたすけるのが真実の誠、とまで御教え下されています。

出典:『話の台』天理教道友社　Web ストアより購入可